

教職教育センタージャーナル

第 3 号

2017.3

●目 次●

〈論 文〉

短期留学が日本人留学生にもたらす影響の実態調査

..... 仁科 恭徳、表谷 純子、森下 美和 1

大学生の意識調査

—— 喫煙が悪影響を及ぼす疾患の認知は喫煙行動の抑止に有効か ——

..... 森本 泰子、山口 孝子、佐藤 美佳 17
中村 真之、松村 政宏、山崎 裕康

〈そ の 他〉

2016年度 中国語スピーチコンテストの参加報告 岩田 弥生 29

「教職教育センタージャーナル」投稿規程

「教職教育センタージャーナル」執筆要領

短期留学が日本人留学生にもたらす影響の実態調査

A Case Study of Effects of a Short-term Study Abroad Program on Japanese University Students

仁科 恭徳¹ 表谷 純子² 森下 美和¹

Yasunori NISHINA, Junko OMOTEDANI, Miwa MORISHITA

(要旨)

グローバル人材育成が急務の課題となっている昨今、学部単位で留学プログラムをカリキュラムの一部に導入する大学が増えつつある。希望者のみが参加する派遣留学とは異なり、卒業要件の一部として義務的に実施される全員留学は、様々な諸問題が想定され、その効果も明らかになっていない。そこで、本稿では、まずこの全員留学に先行して実施された英語圏の短期留学プログラム参加者への質問紙調査結果に基づき、学習者が留学先で実際に何を学び、体験し、感じたかを具体的に調査することで、今後、効果的に全員留学を成功させるための基礎資料を提供する。

(Summary)

This paper attempts to identify factors in student cultural and learning experiences through questionnaire analysis conducted on 16 university students who participated in a month-long Study Abroad (hereafter, SA) program in New Zealand after completing their first year of study. The results of the questionnaire analysis indicate the effectiveness of this SA program on the enhancement of cultural awareness and the improvement in their English communication skills. Nevertheless, regarding the English proficiency such as reading academic papers and authentic materials, the results show the statistically significant differences between two groups. The group which expressed more positive effects on the improvement in the above mentioned English proficiency has a higher pre-SA TOEFL ITP® score compared to the other group. Especially, the listening score is significantly different between the groups. These suggest that the factors for a successful SA program lie not only in a program itself but also in a preparation stage before the SA program. Therefore, this paper scrutinizes the factors leading to success in a SA program and reports on both positive and negative aspects as basic data for constructing effective SA programs in the future.

キーワード：留学プログラム、質問紙調査、ノン・パラメトリック検定

Key Words : Study Abroad Program, Questionnaire Survey, Non-parametric Test

1. 神戸学院大学 グローバル・コミュニケーション学部 准教授

2. 神戸学院大学 グローバル・コミュニケーション学部 非常勤講師

1. はじめに

文部科学省の学習指導要領によると、小学校ではコミュニケーション能力の素地をはぐくみ、中学校では外国語を通じて、言語や文化に対する理解を深め積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図り、高等学校では授業は英語で行うことを基本とし、英語の発信力を高めるよう指導することが教員に求められている。外国語の教員をはじめ様々な分野でのグローバル人材育成が急務の課題となっている昨今、日本の大学業界では、留学プログラムを必修としたカリキュラムの改変、ならびに留学を売りとする新学部の設置が隆盛を迎えつつある。希望者のみを派遣する留学プログラムとは異なり、学部単位で「全員留学」を売りとするこのような各大学の試みは、始まったばかりであり、未だ試験的に実施している感は否めない。

例えば、2015年に新設された神戸学院大学グローバル・コミュニケーション学部では、実践的英語コミュニケーション力が備わった英語教員の養成を一つの目標としており、英語教員志望者を含め全学部生が3年次前期に留学するカリキュラムとなっている。実践的な英語教員を養成するという名目においても、留学経験をより実りあるものにする必要があるが、そのためには英語学習者が留学を通じて実際に何を学び、体験し、感じたかを具体的に調査することは極めて重要であり、その結果は、今後、効果的に留学プログラムを成功させるための基礎資料となりうる。そこで、本稿では、まずグローバル・コミュニケーション学部における全員留学に先行して実施された同じく同学部限定の英語圏短期留学プログラム参加者への質問紙調査結果に基づき、学習者の体験を具体的に可視化する。

2. 先行研究

2. 1. 日本人留学生と外国人留学生の推移

日本学生機構の調査によれば、2014年度の日本人学生の合計留学者数は2012年度と比較して2014年度は15,846名増加しており、グローバル化の波を受け海外留学のニーズが高まっていることが推察される¹。表1の海外留学者数は、1位：アメリカ合衆国(18,769人)、2位：カナダ(7,373)、3位：オーストラリア(7,276)、4位：英国(6,864)と、英語圏への留学が上位を独占し、アメリカ合衆国を中心とした英語圏の人気の高さを示している。

表1. 日本学生機構の調査による日本人学生の海外先・留学者数（一部改変）

順位 (2014年度)	国名	2012年度	2013年度	2014年度	2012年度からの増減
1	アメリカ合衆国	15,422	16,794	18,769	+ 3,347
2	カナダ	6,333	6,614	7,373	+ 1,040
3	オーストラリア	5,768	6,392	7,276	+ 1,508
4	英国	5,641	6,519	6,864	+ 1,223
5	韓国	5,542	5,211	5,533	- 9
6	中国	5,796	4,022	4,765	- 1,031
7	台湾	1,680	2,080	2,974	+ 1,294
8	ドイツ	2,495	2,408	2,768	+ 273
9	タイ	1,909	2,249	2,754	+ 845
10	フランス	2,290	2,309	2,738	+ 448
11	その他	12,497	15,271	19,405	+ 6,908
計		65,373	69,869	81,219	+ 15,846

* 留学者数の増減は論者が算出した。

韓国、中国においては日本人留学者数が減少しているが、台湾、ドイツ、タイ、フランスへの留学者は増加傾向にある。「その他」の海外留学先も2012年度の12,497名から2014年度の19,405名と155%の伸びを示しており、留学先が多様化しつつあることが伺える。

また、同機構の調査によれば、日本への外国人留学生は、2014年5月1日の時点で全体では増加傾向にあり、出身国別の内訳は、1位：中国（94,399人）、2位：ベトナム（26,439人）、3位：韓国（15,777人）、4位：ネパール（10,448人）、5位：台湾（6,231人）と続き、アジア地域からの留学生が9割以上を占めている²。中曽根元首相が83年当時に打ち上げた「留学生10万人受け入れ計画」（門倉1994, p.7）から比べれば、現在、経済産業省が研究会を設置するなど注目している「内なる国際化」も表向きは進展していると言えよう。これに伴い、日本人の「グローバル化」や「異文化理解」の需要は一気に高まっており、海外留学を通じた生の異文化体験を学生にさせることが大学教育でも期待されつつある³。このような流れを受け、最近では、海外留学を卒業要件の一部としてカリキュラムに組み込み、学部レベルで全員留学させる大学も増えつつある。

2. 2. 各大学における全員留学の実施例

表2は、関西圏の大学の学部・学科（もしくはコース）単位で海外留学を必修に入れている4つの私立大学のプログラムの概要で、各学部のホームページで確認できる主要留学先数と、1学年の学生数を派遣先数で割った1校あたりの平均派遣人数も付記している。

表2. 関西4大学における Study Abroad プログラムの概要（2016年8月時点の情報）

大学名	期間	主要留学先	学年	学生数／校（英語圏）
神戸学院大学 G C学部	半年	英語圏（6校） 中国語圏（2校）	3年次前期	12名程度
近畿大学 国際学部	1年間	英語圏（12校） 中国語圏・韓国語圏（4校）	1年次後期 2年次前期	国際学部の1学年の学生数は約500名で提携留学先拠点数は500校を超える。
同志社大学 G C学部	1年間	英語圏（15校） 中国語圏（3校）	2年次	5－6名程度
関西大学 外国語学部	1年間	英語圏（11校） 中国語圏・韓国語圏（2校）	2年次	15名程度

* G Cはグローバル・コミュニケーションを指す。

表2に挙げた大学はあくまで例であり、全員留学を必修としてカリキュラムに組み込んでいる、もしくはその予定をしている大学は他にも多く存在する。例えば、大阪国際大学は、国際教養学部を2015年4月に開設し、3年次に4ヶ月以上の全員留学がカリキュラムの一部となっている⁴。また、一橋大学は2018年度までに新入学生全員を短期語学留学させ、立教大学や早稲田大学も全員留学の方針を打ち出している⁵。派遣する時期や期間は大学によって異なり、派遣先においても昨今の社会のニーズに応え、英語圏のみならず中国や韓国にも派遣先を設けている大学もある。このように、社会進出前の最後の準備期間として、大学在籍中に実際に留学を通して語学習得や異文化理解を促進することが重視さ

れつつある。

2. 3. 留学先での言語習得・異文化交流の問題点

留学費用の高騰や、景気の問題があっても、無理をしても子供を留学に行かせる家庭は多い。しかしながら、念願の海外留学に行ったはいいものの、日本人特有の内向き思考に加え、日本の環境が心地よく、語学習得・異文化交流が失敗に終わる日本人留学生も多い（小林, 2011）。留学すれば何かしらの学びは得られるかもしれないが（Bateson, 1994）、多くの学生は様々な要因から、言語習得や異文化交流において渡航前に描いていたような結果を達成できるわけではない（Kinginger, 2009）。特に、論者がまとめるに、留学先で会う人々との交流や外国語を習得する上で、学生の前には障壁となる3種類の要因が立ちあがる（Ayano, 2006; Jackson, 2006; Pearson-Evans, 2006; Ming-Hung Lam, 2006; Gao, 2010）

表3. 海外留学時に障壁となる3要因とその内容

要因名	要因の変種		
異国生活要因	外国語使用のストレス	外国人という疎外感	現地で出会った日本人との交流
コミュニケーション要因	コミュニケーションスタイルの違い	会話トピックの好み	ユーモアの違い
社会・民族的要因	世界観・価値観・人生観の違い	社会・経済レベルの違い	学術レベルの違い

表3に示す3種の各要因が複雑に絡み合っており、留学先において学習者の言語習得や異文化交流が阻害されることが想定される。この中で、派遣元もしくは受け入れ側の大学が対応できるものの一つは、「現地で出会った日本人との交流」であろう。派遣元の大学では、提携先の環境を入念に調査した上で日本人が少ない派遣先に切り替えるなどの対応をし、また受け入れ先もバランスよく各クラス在籍学生の国籍の割合を考慮する、授業外でもAll Englishを徹底するなど、ある程度は回避できる可能性はある。

しかしながら、他の要因に関しては、自動的にクリアすることは極めて難しく、異文化を知る上ではむしろ醍醐味ともなり得る。よって、視点を変えれば肯定的にも捉えるべき要因であり、実際の質問紙調査でこのような観点が問題になるのかも合わせて調査する。

3. リサーチ・デザイン

3. 1. リサーチ・クエスチョン

2節までの先行研究を概観すると、(日本人) 留学生が留学先で言語習得・異文化交流する際には、それを阻害する様々な要因が存在するため、多くの学生にとって語学習得、異文化交流において留学前に期待していたほどの効果を得るのは難しい。そこで、実際に、どのような側面において、留学先で肯定的・否定的な経験をしているのか、具体的には、「1. どのような異文化体験をしたか?」、「2. どのような英語スキルが身についたと実

感したか?」、「3. どのようなコミュニケーションスキルが身についたと実感したか?」、「4. 海外での生活や学習など留学全般に対しての印象は?」、「5. ホストファミリーとの生活から何を学んだか?」、「6. 留学を経て、どのような英語力を伸ばしたいと感じるか?」の、6つのリサーチ・クエスチョンをたて、調査を進める。

3. 2. 調査協力者

本アンケート調査協力者は、2016年2月20日から3月14日までニュージーランドのハミルトン市に位置する国立ワイカト大学にて英語の語学研修に参加した関西圏の私立大学所属の大学1年生(18-19歳)計16名を対象とし、TOEFL ITP スコアの平均が418点(最大490点、最低360点)の英語力であった⁶。語学研修終了後、本アンケート調査を実施した。

3. 3. 質問紙調査

短期留学を経験した調査協力者に対して3. 1節の各リサーチ・クエスチョンに関する情報を得るため、全32項目の質問紙調査を実施した。Dornyei (2003) に倣い、回答者が考えずに中間カテゴリー(どちらでもない)を選択するのを避けるため、各質問項目について4件法(あてはまる・まあまああてはまる・あまりあてはまらない・あてはまらない)を採用した。実際の質問項目は Appendix1 を参照されたい。調査時期は2016年3月15日から3月31日までで、有効回答数は全16名(男性4名、女性12名)であった。

4. データ分析

4. 1. 2段階尺度分析

質問紙の各項目に対する学生の考えを明確にするため、4段階尺度形式を「あてはまる」「あてはまらない」の2段階に変換した上で再集計し、 χ^2 検定(適合性の検定)を実施した。以下、表4から表9まで調査結果を概観する。なお、各表のQ #は質問項目番号を表し、編みかけの項目は否定的な意味で有意差があったことを表す。

表4「異文化体験に関して」の各項目の χ^2 検定結果($N=16$)

Q #	2段階尺度に変換した集計結果		χ^2 検定結果
	あてはまらない	あてはまる	
1	0	16	16.00 **
2	0	16	16.00 **
3	2	14	9.00 **

* $p < .05$. ** $p < .01$

まず、「異文化体験」に関しては全項目において肯定的な結果となった。興味深いのは、留学経験を通して外国文化がより好きになった(Q2)だけではなく、日本の外で一定期間滞在したことで、自国文化の良さ(Q3)も見えてきたようである。現地で感じた異文化は学生によって異なるものであり、それを如実に反映している肯定的なコメントには、「(学生3) バスでは必ず降りるときにお礼を言ったり、お店の店員さんが Have a nice day

などというのも、印象に残っています。」「(学生6) レディー・ファーストが徹底していること。また、お礼や挨拶がきちんとできている印象を受けました。」「(学生8) 小学生ぐらいの男の子でも、レディー・ファーストをしていたこと。」「(学生9) バスに乗るとき、日本人は男女関係なく停留所に並んだ順に乗っていきますが、ニュージーランドでは先に並んでいても男子高校生たちが女子に順番を譲ってくれて日本にはない文化だと感動するとともに、なんてよい国なんだと思いました。」「(学生15) シャワーはできるだけ短くする必要があった。毎朝、朝食はシリアルで、弁当は必ずサンドイッチとお菓子とリングで日本に比べると質素だった。夕食はワンプレートで、野菜多めで、かなりヘルシーな食事だった。」などがあった。

表5 「英語の基本スキルに関して」の各項目の χ^2 検定結果 ($N=16$)

Q #	2段階尺度に変換した集計結果		χ^2 検定結果
	あてはまらない	あてはまる	
5	1	15	12.25 **
6	1	15	12.25 **
7	0	16	16.00 **
8	8	8	0.00
9	7	9	0.25
10	8	8	0.00

* $p < .05$. ** $p < .01$

次に、「英語の基本スキル」に関しては明暗が分かれた。留学経験者は、英語を用いたコミュニケーション力 (Q 6 ; Q 7) が向上したことは実感している。コメントの一部に、「(学生2) 海外の学校の授業は、日本の授業と違ってすごく能動的な授業だったので、すごくよかったです。自分の意見を言ったり、話し合ったり、ゲームをしながら学んだり、自分から学ぼうとする姿勢を持っていれば、英語力が伸びていく授業だと思いました。」とあり、学生が能動的にコミュニケーションをとるような工夫が授業内でされていることが

表6 「英語の応用スキルに関して」の各項目の χ^2 検定結果 ($N=16$)

Q #	2段階尺度に変換した集計結果		χ^2 検定結果
	あてはまらない	あてはまる	
11	2	14	9.00 **
12	6	10	1.00
13	5	11	2.25 *
14	9	7	0.25
15	11	5	2.25 *
16	7	9	0.25
17	6	10	1.00 *
18	5	11	2.25 *
19	11	5	2.25 *
20	13	3	6.25 *

* $p < .05$. ** $p < .01$

分かる。一方、座学を中心とするライティング力（Q8）やリーディング力（Q9）、文法力（Q10）にはあまり効果を実感していないが、このようなスキルは、日本在学中にでも十二分に鍛えることが可能であり、留学後にもあまりその効果が期待できないことから、留学前の派遣元大学のカリキュラムの中でしっかりと教育していく必要があろう。

「英語の応用スキル」に関しても、海外留学が肯定的に影響しているものと、学習者がその効果をあまり実感していないものとに分かれた。自分の考えを表現（Q11）したり、発音を意識したり（Q13）、英日翻訳に慣れたり（Q17）、文法をより意識するようになった（Q18）ようである。これは、実際に英語でコミュニケーションをとる機会が圧倒的に増え、自らの意見を発話・表現する機会が増えたため、必然の結果であったと言えるかもしれない。一方、語彙力（Q12）、実践的且つ高度なインプット力（Q14；Q15；Q19；Q20）、実践的且つ机上のアウトプット力（Q16）には効果を実感していない。

表7 「コミュニケーション力に関して」の各項目の χ^2 検定結果（ $N=16$ ）

Q #	2段階尺度に変換した集計結果		χ^2 検定結果
	あてはまらない	あてはまる	
21	1	15	12.25 **
22	2	14	9.00 **
23	1	15	12.25 **
24	8	8	0.00
25	13	3	6.25 *
26	1	15	12.25 **
27	1	15	12.25 **

* $p < .05$. ** $p < .01$

表6までの結果から、留学経験者は「コミュニケーション力」の向上を概ね実感しているようであるが、表7からもそれは読み取れる。日常生活に支障をきたさないコミュニケーション力がつき（Q22）、内向きの日本文化から外向きの欧米文化へと性格が変容してきている（Q23）。一方でネガティブな結果も読み取れ、地元民との交流機会は参加者によって異なっていたこと（Q24）、アジア人（特に日本人）と話す機会が多かったこと（Q25；Q26）が分かる。海外留学をしたからといって、自ら積極的に交流を求めなければ、現地人との交流は難しく、ホストファミリーによってもそのコミュニケーション量に差があるようである（参加者との私信）。こちらは表3で論者がまとめた海外留学時に障壁となる3要因の内容とも合致する。

表8 「留学全般に関して」の各項目の χ^2 検定結果（ $N=16$ ）

Q #	2段階尺度に変換した集計結果		χ^2 検定結果
	あてはまらない	あてはまる	
28	1	15	12.25 **
29	0	16	16.00 **
30	0	16	16.00 **

* $p < .05$. ** $p < .01$

「留学全般」に関しては、日本の大学で受けている授業とは異なり、あくまで本当の意味でのオールイングリッシュ（Q28）を好意的に受け取る学生が多かった。また、内容は違えど各参加者には留学時に何かしらネガティブな側面が認められたにもかかわらず、参加者全員が再度留学を強く希望し（Q29）、内面的にもポジティブな方向へと変容している様が見える（Q30）。

表9 「ホストファミリー制度に関して」の各項目の χ^2 検定結果（ $N=16$ ）

Q #	2段階尺度に変換した集計結果		χ^2 検定結果
	あてはまらない	あてはまる	
31	1	15	12.25 **
32	3	13	6.25 *

* $p < .05$. ** $p < .01$

「ホストファミリー制度」に関しては、異文化体験（Q31）や英語の習得（Q32）の側面で効果的と感じた学生がほとんどであった。全ての学生のコメントは紹介できないが、「（学生10）ホストファミリーに自分たちと同年代の人がいて、その人が遊びに連れて行ってくれた時に、ホストファミリーの友達などと会話をしたり、遊んだりし、若者の文化を体験できたことが一番印象に残っている文化体験です。」や、「（学生16）ホストファザーのお父さんの誕生日パーティーが印象に残りました。ニュージーランド式のパーティーではなかったらしいのですが、日本では経験したことのない誕生日会でした。日本では家に仲の良い友人を招いてすることはよく聞きますが、この時は親戚が大集合し、身内で祝う形でした。料理も豚の丸焼きをメインにした豪華なものでした。」など、学生にとってホストファミリーとの生活が異文化体験や英語を使う絶好の機会であったことが分かる。今回参加した学生は、現在までに海外での寮生活を体験していないため、どちらの宿泊形態が異文化体験・英語習得の上で効果的であるのかという比較体験はできないが、概ね満足しているようである。

4. 2. 質問紙調査：クラスター分析

次に、留学を体験した学生間の類似性と異なりを可視化するため、アンケート項目のうち最後の項目（履修したい科目に関する質問）を除く全32変数を用いて、短期留学修了生のグループ分けを実施した。平方ユークリッド距離を用いたウォード法によるクラスター分析（サンプルクラスター分析）を行い、エントロピーによって自動判別した結果、大きく4つのクラスターに類別できた（図1参照）。ただし、学生14（以下、図中では「学生」をSとする）は他の結果とはかなり離れていたため外れ値と判断し、残りのデータで再度クラスター分析を行った。その結果、第一クラスターには4名、第二クラスターには11名の調査対象者が含まれていた。

次に、各クラスターの特徴を調べるため、カレイラ（2015）に倣い、各項目についてマン・ホイットニーのU検定を行った。ノンパラメトリック法のマン・ホイットニーのU検定を採用したのは、正規性検定（Shapiro-Wilk）の結果、ほとんどの質問項目において正規

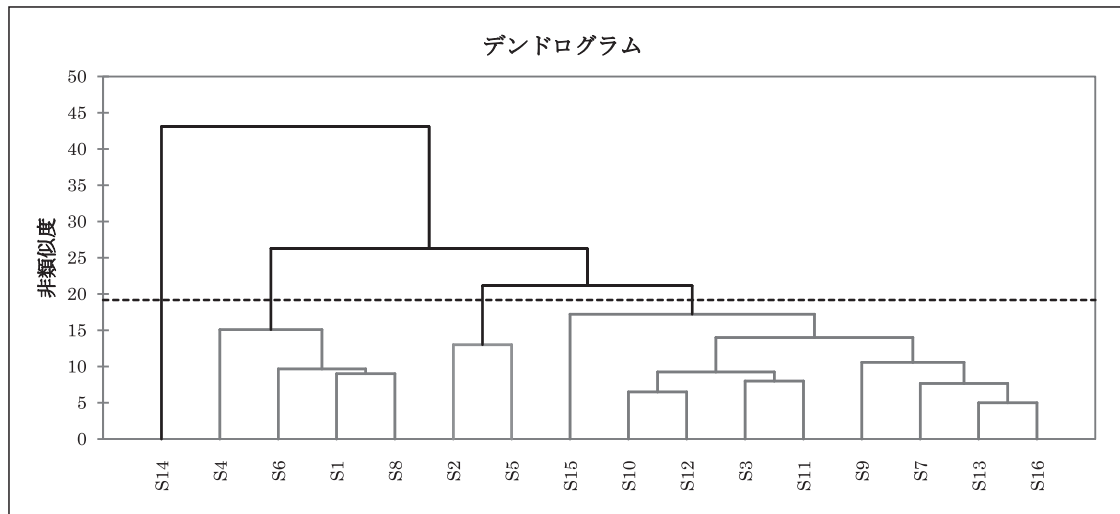


図1. クラスター分析の結果1（全被験者データの場合）

分布していなかったためである。各項目の群間で特に有意差がみられたものが表10であり、マン・ホイットニーのU検定（有意水準5％）の調査結果も併せて示している（元の4件法での分析を実施）。なお、全項目の結果はAppendix2を参照されたい。

表10. クラスター間で有意な差が認められた4項目

Q #	第一クラスター（N=4）		第二クラスター（N=11）		マン・ホイットニーのU
	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差	
9	3.50	0.50	2.55	0.66	7.00 *
14	3.25	0.43	2.18	0.39	3.00 **
15	3.25	0.43	2.09	0.29	1.50 **
20	3.00	1.00	1.64	0.64	7.00 *

* $p < .05$. ** $p < .01$

クラスター間で有意差が見られた項目は、（Q9）「リーディング力の向上の実感」、（Q14）「英語の映画やテレビ、ラジオ番組、歌などが理解できるようになった」、（Q15）「英語の本や新聞、雑誌などを読むことができるようになった」、（Q20）「英語の専門書・論文を早く効果的に読むことができるようになった」の4項目である。このマン・ホイットニーのU検定の結果から、第一クラスターの方が第二クラスターよりも、高度且つ実践的な英語力が身についたかどうかという点で有意な差が見られる。よって、第一クラスターは「高度な英語力習得」群、第二クラスターは「一般的な英語力習得」群とすることができる。

それでは、なぜ第一クラスター群のメンバーは高度な英語力を身につけたと実感したのであろうか。以下は、クラスター間のTOEFLITPの結果を以下に示す。なお、被験者のTOEFLスコアに関しては、Shapiro-Wilkの正規性検定で正規分布とみなすことが出来たため、 t 検定の結果も合わせて示す。

表11. クラスター間での TOEFLITP スコアの比較

	第一クラスター (N=4)		第二クラスター (N=11)		t (12)
	平均点	標準偏差	平均点	標準偏差	
L	47.75	2.62	43.1	3.11	2.62 *
G	41.75	5.30	39.9	3.42	0.60
R	42.50	3.10	41.4	5.89	0.42
Total	439.75	28.57	414.60	29.01	1.37

* $p < .05$. ** $p < .01$

表11の結果から、トータルスコアを含め全セクションに関して、平均点は第一クラスターが第二クラスターを上回っている。また、有意水準5%で両側検定の t 検定を実施したところ、リスニングスコアは $t(12) = 2.62$ 、 $p = .02$ 、グラマースコアは $t(12) = 0.60$ 、 $p = .56$ 、リーディングスコアは $t(12) = 0.42$ 、 $p = .68$ 、トータルスコアは $t(12) = 1.37$ 、 $p = .20$ となり、クラスター間で有意差が見られたのはリスニングスコアであった。つまり、留学前の英語力の差が、留学を通して向上したと感じる質問項目と密接に関連していると予測できる。クラスター間で有意な差が見られたQ9、Q14、Q15、Q20はどれも高度な英語力を必要とするものであり、元々英語の基礎力が高かった第一クラスターの方が、実際に留学を通してさらに高度な英語力が身についたと感じるようである。留学中は全てのインストラクションが英語で行われるため、特にリスニング力が高く有意差が認められたグループの方が、リーディング等も含めた留学中の学習に有利に働いていると予測できる。

また、この結果から、留学期間の学習をより効果的にするためにも、留学前に十二分に語学指導をしておく必要があると言えよう。第一クラスターに分類された被験者のコメントには、「(学生6) アカデミックな内容の授業でもディスカッションの機会が多く、自分の考えを持つ、相手に伝える、という機会が多くありコミュニケーション能力を鍛えられました。まだ自分の言いたいことを英語で表現しきれずにもどかしい思いをすることも多いですが、相手に伝えようと工夫する力がついたように思います。」とあり、学術的な内容に関してもリスニングも含めたコミュニケーション力が求められる授業内容であったことが分かる。

5. 考察

5. 1. リサーチ・クエスチョンへの回答

以下は各リサーチ・クエスチョンに対して、本調査で明らかにした回答である。まず、「RQ1. どのような異文化体験をしたか？」に関しては、挨拶、(レディーファーストなどの) ジェンダー、食生活、民族の歴史、生活スタイル、娯楽など、一般的な生活に関わる広範囲の事柄に関して、日本との異文化を経験したようである。先行研究では、留学生が地元民との目標言語を介した社会的交流機会を得ることがいかに困難であるかが指摘されているが、本調査の結果から、ホストファミリーとの生活やコミュニケーションが実は、最も親しくなった地元民との目標言語を介した社会的交流機会であることが分かる。次

に、「RQ2. どのような英語スキルが向上したと実感したか？」に関しては、コミュニケーション力が必要となるスピーキング力とリスニング力に関して、英語スキルの向上を実感したようである。また、読解や実践的な英語力の向上に関しては、被験者間で差が見られた。特に、留学前から英語力が高かった学生、特にリスニング力が高かった学生にとっては、アカデミックな英語力を含めた高度な英語力においても向上したと実感したようである（クラスター分析とマンホイットニーのU検定の分析結果を参照）。

そして、「RQ3. どのようなコミュニケーションスキルが身についたか？」に関しては、初対面でも積極的に話しかけるようになるなど、日本人の典型的な特徴である内向的な性格から、自らの意見を積極的に発する外交的な性格へと成長したようである。また、「RQ4. 留学（海外での生活や学習）に対しての印象は？」に関しては、異文化体験を通して、外国文化の良さを実感するだけでなく、そのような異文化を通して日本文化の良さを再実感したようである。最後に、「RQ5. ホストファミリーとの生活から何を得たか？」に関しては、ホストファミリーとの生活を通して、異文化体験をした被験者も多く、現地の実際の生活を疑似体験することで、RQ1 と RQ4 に対する回答の効果が得られた。

5. 2. 留学を経て

最後に、RQ6「留学を経て、どのような英語力を伸ばしたいと感じるか？」（複数回答可）の質問項目の集計結果は、海外留学（16名）、試験対策（TOEIC、TOEFL など）（14名）、スピーキング（14名）、留学生との交流授業（13名）、外国人との会話ラウンジ（課外授業）（13名）、ネイティブスピーカーによる授業（12名）、リスニング（7名）、映画やテレビ、歌などを用いた授業（7名）、文法（6名）、読解（3名）、コンピュータ利用による個人学習（2名）、その他（0名）であった。よって、短期留学経験者は、全般的にコミュニケーションを高める授業を渴望していることが分かる。留学経験を通して、コミュニケーション力の向上を実感したようであり、特に再度留学したいと感じている学生は全員であった。また、TOEFL などの試験対策に関しても需要が高い結果となった。一方で、留学期間中に向上したと感じられなかった文法や読解、映画やテレビ、歌などを用いた実践的英語力を伸ばしたいという学生は少ないことも分かる。本来であれば、このような力を身につけることで連動して総合的な英語力も向上するはずであるが、留学体験者はそれを実感していないため、留学前に大学のプログラムの中で特に文法や読解は集中的に鍛える必要があり、これらの向上こそが留学を成功させる秘訣であることも本調査結果から明らかとなった。

6. 結語

6. 1. まとめ

本稿では、英語圏の短期留学プログラムに参加した大学生への質問紙調査結果に基づき、留学中に得た経験を詳細に可視化した。その結果、短期間であっても、コミュニケーション力の向上、英語力向上に向けたこれからの課題、異文化体験、自国愛の向上など、多くの項目において参加者に肯定的な効果があることが分かった。また、海外留学時に障壁となる3要因に関しては、当該プログラムの引率者であった論者が感じるに、今回は異国生

活要因（外国語使用のストレス、外国人という疎外感、現地で出会った日本人との交流）が参加者の異文化交流や語学学習に影響していると感じた。これは、今回は短期留学であったことが主な理由であると考えられ、今後、彼らが長期留学を体験し、現地人や外国人留学生と多くの交流を持つことによって、他の2要因であるコミュニケーション要因（コミュニケーションスタイルの違い、会話トピックの好み、ユーモアの違い）と社会・民族的要因（世界観・価値観・人生観の違い、社会・経済レベルの違い、学術レベルの違い）が障壁となる可能性は高い。このような予測される障壁の対策としての授業を長期留学前に提供し、異文化生活に向けて入念に準備することこそが、留学を成功させる一つの方策であろう。

6. 2. 今後の課題

今後の課題として、引き続き同様の調査を経年的に実施することで、留学に対する経験・意識等の変化を調査していきたい。この理由として、本研究は関西圏の中堅私立大学1校に所属する大学1年生16名から収集したデータに基づいていることから、結果を一般化することが難しい。Long (2005)によると、ニーズ分析は多角的な角度から調査を行い、調査協力者のサンプリングを考慮する必要がある。無論、広い地域から複数の大学に所属する学生のデータを集め分析する必要もあるが、さらには、同様の調査を学年別（例. 1年生、2年生、3年生、4年生）、世代別（例. 10代、20代、30代）、職業別（例. 学生 vs. 社会人）、大学別（例. 国立 vs. 私立）、地方別（例. 都会 vs. 地方）、宿泊形態別（例. 寮 vs. ホームステイ）など、多角的要素から分析し、その結果を集約していくことで、海外留学が日本人英語学習者に与える影響を詳細に特定することができ、より洗練された形で一般化することも可能となろう。最後に、近い将来、本学部を卒業した学生で英語教員になった学生に、大学時代の留学経験がどのように教員活動の中で活かされているかを追跡調査することで、留学経験が次世代の英語教員養成に必要不可欠であることを示したい。

注

- 1 日本人学生の海外留学状況 (http://www.jasso.go.jp/about/statistics/intl_student_s/index.html)
- 2 平成26年度外国人留学生在籍状況調査等について (http://www.mext.go.jp/a_menu/koutou/ryugaku/_icsFiles/afldfile/2015/03/16/1345878_02.pdf)
- 3 初瀬 (1988) によると国際化の内なる局面を(1) 「日常の中の国際化」状況、(2) その状況に対応すべき「心の中の国際化」、(3) 未来を切り開く「市民の国際化」活動とし、門倉 (1994, p.3) は「国内」「内面」「内発的」国際化と言い換えている。内なる国際化とは、「国境なき経済が展開されるなかで、世界とともに生きるために、モノ・カネの国際化のみならず、文化や習慣などの心理面や精神面の国際化も必要である。人の交流を通じた文化や習慣の相互理解が必要で、外国人労働者や留学生の受け入れ等が有効で、それにより日本人の心や慣行を国際的に開くことをいう。」 (<http://www.city.shunan.lg.jp/hp/gappei/sg0708.htm>)
- 4 大阪国際大学国際教養学部HP (<http://www.oiu.ac.jp/kk/>)
- 5 日本経済新聞 電子版 2014年7月3日「一橋大、新入生の留学必修に 立教や早稲田も」 (http://www.nikkei.com/article/DGXNASDZ03001_T00C14A7MM0000/)
- 6 ワイカト大学の学生数は約13,000人で、そのうち約2,800人が70カ国からの留学生である。

Appendix

1. 質問項目は以下のとおりである。1. あてはまらない、2. あまりあてはまらない、3. まあまああてはまる、4. あてはまる、で回答を依頼した。
1. 異文化体験が出来た。 2. 外国の文化が好きになった。 3. 日本の文化がより好きになった。 4. 印象に残った海外での文化体験を述べて下さい。(自由記述) 5. 何かしら英語力が向上した(と思う)。 6. スピーキング力が向上した(と思う)。 7. リスニング力が向上した(と思う)。 8. ライティング力が向上した(と思う)。 9. リーディング力が向上した(と思う)。 10. 文法力が向上した(と思う)。 11. 英語で自分の考えや感情、言いたいことを表すことができるようになった。 12. 英語の単語やイディオム、言い回しをたくさん覚えることができた。 13. 英語の正しい発音を身につけることができた。 14. 英語の映画やテレビ、ラジオ番組、歌などが理解できるようになった。 15. 英語の本や新聞、雑誌などを読むことができるようになった。 16. 英語でe-mail／手紙を読んだり書いたりできるようになった。 17. 英語を日本語に円滑に訳すことができるようになった。 18. 英語の文法を意識するようになった。 19. 英語で学問的・専門的な講義を理解することができるようになった。 20. 英語の専門書・論文を早く効果的に読むことができるようになった。 21. 何かしらコミュニケーション力が向上した(と思う)。 22. 英語で様々な日常的状況に対処することができるようになった。 23. 初対面の人でも抵抗なく話せるようになった。 24. 地元の人と話す機会が多かった。 25. アジア人以外と話す機会が多かった。 26. アジア人と話す機会が多かった。 27. 日本人と話す機会が多かった。 28. オールイングリッシュがよかった。 29. 海外にもう一度留学したい。(選択・自由記述両方) 30. 留学して自分は良い方向に変わったと思う。(選択・自由記述両方) 31. ホストファミリーを通して異文化を学ぶことができた。 32. ホストファミリーを通して英語を学ぶことができた。 33. 印象に残ったホストファミリーとの体験を述べて下さい。(自由記述)

【留学を終えて今後受講したい授業・プログラムは?】(複数選択可)

1. 試験対策(TOEIC、TOEFL、IELTS、英検など) 2. 文法を徹底的に教えてくれる授業 3. 読解を徹底的に教えてくれる授業 4. リスニングを徹底的に教えてくれる授業 5. スピーキングを徹底的に教えてくれる授業 6. 英語のネイティブスピーカーによる授業 7. 留学生と交流できる授業 8. 映画やテレビ、歌などを使った授業 9. コンピュータを利用した個人でじっくり勉強できる自学自習授業 10. スタッフが外国人しかいないラウンジでいつでも会話できる課外授業 11. 海外の大学への長期・短期留学 12. その他

2. 各質問項目の群別の平均値・標準偏差とマン・ホイットニーのU検定の結果は以下のとおりである。

項目	第一クラスター (N=4)		第二クラスター (N=11)		マン・ホイットニーのU
	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差	
1	3.75	0.43	3.82	0.39	23.50
2	3.50	0.50	3.64	0.48	25.00
3	3.25	0.43	3.00	0.60	17.50
5	4.00	0.00	3.73	0.45	16.00
6	3.50	0.50	3.36	0.48	19.00
7	4.00	0.00	3.55	0.50	12.00
8	2.75	0.43	2.55	0.66	17.00
9	3.50	0.50	2.55	0.66	7.00 *
10	2.75	0.43	2.55	0.89	18.00
11	3.00	0.00	3.09	0.51	24.00
12	2.75	0.43	2.73	0.62	21.00
13	2.75	0.43	2.82	0.57	23.00
14	3.25	0.43	2.18	0.39	3.00 **
15	3.25	0.43	2.09	0.29	1.50 **
16	3.00	0.00	2.64	0.77	14.00
17	3.25	0.43	2.55	0.50	9.00
18	2.75	0.43	3.00	0.74	26.00
19	2.75	0.43	1.91	0.67	8.00
20	3.00	1.00	1.64	0.64	7.00 *
21	3.50	0.50	3.82	0.39	29.00
22	3.25	0.43	3.45	0.66	27.00
23	3.50	0.50	3.45	0.66	22.00
24	2.75	0.43	2.55	0.66	17.00
25	1.75	0.43	2.27	0.75	30.00
26	3.25	0.83	3.73	0.45	28.50
27	3.25	0.83	3.73	0.45	28.50
28	3.50	0.87	3.55	0.50	20.00
29	3.75	0.43	4.00	0.00	27.50
30	3.50	0.50	3.64	0.48	25.00
31	3.00	0.71	3.73	0.45	34.00
32	3.00	0.71	3.55	0.78	31.00

* $p < .05$. ** $p < .01$

参考文献

- 初瀬龍平 (1988) 『内なる国際化』 三嶺書房.
- 門倉正美 (1994) 「『内なる国際化』と日本語教育」『横浜国立大学留学生センター紀要』 No. 1, 1-17
- カレイラ松崎順子 (2015) 『大学生を対象にした英語学習に対するニーズ分析』 統計数理研究所.
- 小林明 (2011) 「日本人学生の海外留学阻害要因と今後の対策」『ウェブマガジン留学交流』 2011年5月号
Vol.2 <http://www.jasso.go.jp/about/documents/akirakobayashi.pdf>
- 日本学生支援機構「協定等に基づく日本人学生留学状況調査」
http://www.jasso.go.jp/about/statistics/intl_student_s/index.html
- 文部科学省「現行学習指導要領・生きる力」
http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/index.htm
- 文部科学省「『日本人の海外留学者数』及び『外国人留学生在籍状況調査』について」
http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/25/02/1330698.htm
- Ayano, M. (2006). Japanese students in Britain. In M. Byram & A. Feng (Eds.), *Living and studying abroad* (pp. 11-37). Clevedon: Multilingual Matters.
- Beteson, M. (1994). *Peripheral visions*. New York: Harper Collins.
- Dornyei, Z. (2003). *Questionnaires in second language research: Construction, administration and processing*. Mahwah, NJ: Lawrence Erlbaum Associates.
- Gao, X. (2010). To be or not to be “part of them”: Micropolitical challengers in Mainland Chinese students’ learning of English in a multilingual university. *TESOL Quarterly*, 44, 274-294.
- Jackson, J. (2006). Ethnographic pedagogy and evaluation in short-term study abroad. In M. Byram & A. Feng (Eds.), *Living and studying abroad* (pp. 134-156). Clevedon: Multilingual Matters.
- Kinginger, C. (2009). *Language learning and study abroad: A critical reading of research*. Basingstoke: Palgrave Macmillan.
- Long, M.H. (2005). *Second Language Needs Analysis*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Ming-Hung Lam, C. (2006). Reciprocal adjustment by host and sojourning groups: Mainland Chinese students in Hong Kong. In M. Byram & A. Feng (Eds.), *Living and studying abroad* (pp. 91-107). Clevedon: Multilingual Matters.
- Pearson-Evans, A. (2006). Recording the journey: Diaries of Irish students in Japan. In M. Byram & A. Feng (Eds.), *Living and studying abroad* (pp.38-63). Clevedon: Multilingual Matters.
- ReseMom (リセママ) (2015) 「2012年の海外留学者数が8年ぶりに増加、留学先1位は中国」
(<http://resemom.jp/article/2015/03/02/23238.html>)

大学生の意識調査

—— 喫煙が悪影響を及ぼす疾患の認知は喫煙行動の抑止に有効か ——

Questionnaire survey for university students suggested a possibility that the knowledge of health hazard by smoking prevent to begin smoking

森本 泰子 山口 孝子 佐藤 美佳
中村 真之 松村 政宏 山崎 裕康

Yasuko Morimoto, Takako Yamaguchi, Mika Satoh,
Masayuki Nakamura, Masahiro Matsumura, Hiroyasu Yamazaki

(要旨)

未成年の喫煙防止に向け、喫煙防止教育は重要である。そこで、有効な教育内容を検討するため、神戸学院大学の在学学生を対象として喫煙に関する意識調査を行った。学部別に比較した結果、喫煙率が他学部よりも低い栄養学部や薬学部では、喫煙や受動喫煙でリスクが高まると認識している疾患の数が多かった。喫煙率の低かった2つの学部では、他学部に比べて、喫煙でリスクが高まる疾患として肺がん以外のがん、慢性閉塞性肺疾患（COPD）、高血圧、動脈硬化などを選択する率が高く、受動喫煙でリスクが高まる疾患として気管支喘息、虚血性心疾患などを選択する率が高かった。経済学部では、元喫煙者と喫煙者の間に差がみられ、心筋梗塞の選択率が前者で高かった。また、喫煙者の中で、禁煙を経験した人は、経験していない人より多くの疾患を認識しており、COPDを選択する割合が高かった。これらの結果から、健康被害を幅広く認識させることが喫煙防止に有効と考えられた。

(Summary)

To investigate effective education for prevention of smoking, we conducted a questionnaire survey on the cognitions of university students concerning smoking. Daily smokers were fewer in the faculty of nutrition or pharmaceutical science than in other faculties. In particular, students in these two faculties were more aware that smoking increases the risk of cancer of internal organs except for lungs, chronic obstructive pulmonary disease (COPD), hypertension, arteriosclerosis. Regarding the diseases caused by passive smoking, more students understood bronchial asthma and ischemic heart disease in these two faculties. In the faculty of economics, more students who had stopped smoking understood the risk of myocardial infarction than smokers. Additionally, students who had experienced abstention from smoking recognized COPD more than the inexperienced students. These results indicate that it is important to increase understanding of the health hazards of smoking in order to prevent against smoking.

キーワード：喫煙防止教育、健康被害、慢性閉塞性肺疾患、心疾患

Key Words : smoking prevention, health hazard, chronic obstructive pulmonary disease, heart disease

緒言

喫煙は肺がんだけでなく、虚血性心疾患、慢性閉塞性肺疾患、糖尿病、歯周病など多くの疾患のリスクを高めることが知られており、その健康被害は受動喫煙でも引き起こされることがわかっている（喫煙と健康問題に関する検討会 2002, 米国公衆衛生総監報告 <http://www.ncc.go.jp/jp/who/sg/index.html>）。2003年に施行された健康増進法では、学校などの施設の管理者に受動喫煙を防止する措置が求められており、神戸学院大学では、2004年から指定場所以外での敷地内禁煙措置がとられている。しかし、受動喫煙は、副流煙だけでなく喫煙後に吐き続ける呼出煙や衣服などに残留した物質でも起こるとされているため、最も効果的な受動喫煙防止策は喫煙者を減らすことと考えられる。

喫煙者は社会的ニコチン依存度（Yoshii 2006）が非常に高いため、禁煙には支援が必要不可欠であるが、支援を得る機会は少なく、また、得たとしても禁煙は容易ではない。したがって、喫煙者を減らすためには、禁煙支援に加えて、新たな喫煙者を増やさないこと、すなわち喫煙を開始させないことが重要である。学生の喫煙行動には周囲の喫煙者の存在が大きな影響を与えることから、吸えない環境作りとともに、喫煙防止教育が大きな役割を果たすと考えられる。

喫煙防止教育については、薬物乱用防止教育の一部として以前から行われていたが、2008年の学習指導要領の改訂で、喫煙が健康を損なう原因となることを理解させることが求められている。

以前、我々は本学3年次生への意識調査の結果から、これまでの喫煙防止教育では、喫煙による健康被害について、ある程度は周知されているが、まだ十分ではない可能性があることを報告した（森本 2015）。

今回は、さらに調査対象を広げ、神戸学院大学の全学年の学生に対して、喫煙の害に関する認識と喫煙状況をアンケート調査し、より有効な喫煙防止教育のあり方について考察したので報告する。

方法

1. 対象及び調査方法

神戸学院大学（以下、本学）の医療系3学部（薬学部、栄養学部、総合リハビリテーション学部）および非医療系5学部（法学部、経済学部、経営学部、人文学部、現代社会学部）の計8学部に在籍する学生を対象として、無記名のアンケートを実施した。2014年3月から4月にかけて、学内で実施された健康診断を受診した学生に対して無記名自記式質問調査を行った。アンケート調査への協力は任意とし、対象者には口頭および書面にて記入事項に関するプライバシー保護について説明した。同意が得られた者のみから調査票を回収した。記入漏れや記入ミスのあった調査票は除外した。以前の検討で、喫煙あるいは受動喫煙によってリスクが高くなる疾患について、該当する疾患のみを選択肢としたため、すべてを選択した回答者が実際に疾患を認知しているか否かの判断ができなかった（森本 2015）。そこで、今回は、疾患の認知度を計るため、誤りの選択肢を提示し、この回答者を除外した。喫煙、受動喫煙によっては、選択肢としてあげていない疾患も含めて数多くの

疾患のリスクが高くなるとされているが、潰瘍性大腸炎については、喫煙でリスクが低くなる可能性が示されているため（公益財団法人喫煙科学研究財団 <http://www.srf.or.jp/histoly/frames/history-frame12.html>），これを誤りの選択肢とした。

2. 調査内容

アンケート用紙を図1 Aと図1 Bに示す。質問項目Ⅰは学部，性別，年齢，Ⅱは喫煙状況とこれまでに受けた喫煙防止教育について，および喫煙・受動喫煙による害についての質問とした。3年次以上には，Ⅲを喫煙者に対するFTND（ファーガストロームニコチン依存度），Ⅳを全員に対する加濃式社会的ニコチン依存度（KTSND）の質問票とした。1，2年次生には，倫理的配慮から喫煙状況に関する質問を除き，ⅢをKTSNDの質問票とした。

3. 統計解析

喫煙，非喫煙などのグループごとにおける平均値の差の検定には，クラスカル・ウォーリスのH検定およびDunn法による多重比較を用いた。2群間の平均値を比較する場合にはマンホイットニーのU検定を用いた。また，回答人数の割合の比較は χ^2 検定により行い，必要に応じてイエーツの補正を行った。相関については，ピアソンの相関係数の検定を行った。いずれの場合も，危険率5%を有意水準とした。

4. 倫理的配慮

本研究は，本学の「ヒトを対象とする研究等倫理委員会」の承認（承認番号：HEB131218-3）を得て行った。

大学生の意識調査

喫煙に対する意識調査

ご協力をお願いします。 薬学部 衛生化学研究室 佐藤美佳 中村真之 松村政宏
(調査責任者 山口孝子)

- ・衛生化学研究室では、これまで、喫煙が生体に及ぼす影響についての研究に取り組んできました。
- ・このアンケート調査によって、皆様の喫煙に対する意識及び本学における喫煙状況を把握し、さらには喫煙による健康被害の予防、禁煙を目指す学生の支援に貢献できるようになりたいと考えています。
- ・アンケートに回答いただくことにより、この調査に同意をいただいたことになります。個人を特定し得る情報の公表は一切ありません。なお、アンケート結果は学会や学術誌へ公表されることがあることをご了承ください。

あてはまる選択肢に○をつけるか、() 内に数値・語句を記入してください。

- I** 1. 学部 : a. 法学部 b. 経済学部 c. 経営学部 d. 人文学部
e. 総合リハビリテーション学部 f. 栄養学部 g. 薬学部
2. 学年 : a. 新3年 b. 新4年 c. 新5年 d. 新6年 e. 大学院
3. 性別 : a. 男 b. 女
4. 年齢 : () 歳
- II** 1. 周りでタバコを吸っている人はいますか? いる場合、それは誰ですか? (複数可)
a. 家族 b. 友人 c. 先生 d. 恋人 e. その他 () f. 吸う人はいない
2. あなたはタバコを吸いますか?
a. 毎日吸う b. ときどき吸う c. 吸っていたがやめた d. 吸ったことがない
3. 喫煙防止教育を受けたことがありますか? ある場合、それはいつ頃ですか? (複数可)
a. 小学校 b. 中学校 c. 高校 d. 大学 e. その他 ()
f. 受けたことがない (f と答えた方は、6にお進みください)
4. これまでに何回ぐらい喫煙防止教育を受けましたか?
a. 1回 b. 2~4回 c. 5~8回 d. 9回以上
5. どのような喫煙防止教育を受けましたか? (複数可)
a. 講演会 b. 家庭内 c. 授業 d. その他 ()
6. 喫煙は身体に様々な影響を与えています。喫煙によりリスクが高まることが報告されている疾患等には、次のどれが該当すると思いますか? (複数可)
a. 肺がん b. 気管支がん c. 喉頭がん d. 食道がん e. 胃がん
f. 肝がん g. 膵がん h. 大腸がん i. 胃潰瘍 j. 潰瘍性大腸炎
k. うつ病 l. 高血圧 m. 動脈硬化 n. 心筋梗塞 o. 骨粗鬆症
p. 気管支喘息 q. COPD (慢性閉塞性肺疾患) r. 白内障 s. 歯周病 t. 流産

18. もし学内で、禁煙・喫煙防止に関する講習会・イベント等があれば、参加しますか?
a. 参加する b. 参加しない c. わからない

III タバコに対する意識をお尋ねします。

あなたの気持ちに一番近いものをa~dの中から選んで下さい。

1. タバコを吸うこと自身が病気である。
a. そう思う b. ややそう思う c. あまりそう思わない d. そう思わない
2. 喫煙には文化がある。
a. そう思う b. ややそう思う c. あまりそう思わない d. そう思わない
3. タバコは嗜好品 (味や刺激を楽しむ品) である。
a. そう思う b. ややそう思う c. あまりそう思わない d. そう思わない
4. 喫煙する生活様式も尊重されてよい。
a. そう思う b. ややそう思う c. あまりそう思わない d. そう思わない
5. 喫煙によって人生が豊かになる人もいる。
a. そう思う b. ややそう思う c. あまりそう思わない d. そう思わない
6. タバコには効用 (からだや精神に良い作用) がある。
a. そう思う b. ややそう思う c. あまりそう思わない d. そう思わない
7. タバコにはストレスを解消する作用がある。
a. そう思う b. ややそう思う c. あまりそう思わない d. そう思わない
8. タバコは喫煙者の頭の働きを高める。
a. そう思う b. ややそう思う c. あまりそう思わない d. そう思わない
9. 医者はタバコの害を騒がすがる。
a. そう思う b. ややそう思う c. あまりそう思わない d. そう思わない
10. 灰皿が置かれている場所は、喫煙できる場所である。
a. そう思う b. ややそう思う c. あまりそう思わない d. そう思わない

7. 「受動喫煙」という言葉を知っていますか?
a. 意味も含めて知っている b. 言葉は知っているが、意味はよくわからない
c. 今回の調査で初めて知った
8. 「受動喫煙」とは、他人のタバコの煙を吸われることをいいます。
あなたは「受動喫煙」にあったことがありますか? a. ある b. ない

問8で「ある」と答えた方にお尋ねします。 (「ない」と答えた方は11にお進みください。)

9. あなたは、これまで受動喫煙にあったとき、不快に感じましたか?
a. 不快に感じた b. どちらかといえば不快に感じた
c. どちらかといえば不快に感じなかった d. 不快に感じなかった
10. あなたは、そのときどのような行動をとりましたか? (複数可)
a. 喫煙者に喫煙を控えるよう求めた b. 自分が席や場所を移動した
c. 自分が我慢した d. 特に行動しなかった
11. 受動喫煙は身体に悪影響をもたらしていると思いますか?
a. そう思う b. ややそう思う c. あまりそう思わない d. そう思わない
12. 受動喫煙によりリスクが高まることが報告されている疾患等には、次のどれが該当すると思いますか? (複数可)
a. 肺がん b. 胃がん c. 肝がん d. 副鼻腔がん e. 膀胱がん
f. 小児がん g. 乳がん h. 気管支喘息 i. 中耳炎 j. 潰瘍性大腸炎
k. 虚血性心疾患 l. 低体重出生児 m. 乳幼児突然死症候群
13. 禁煙支援活動に関心はありますか?
a. 関心がある b. やや関心がある c. あまり関心がない d. 関心がない
14. 禁煙指導は薬剤師の仕事であると思いますか?
a. そう思う b. ややそう思う c. あまりそう思わない d. そう思わない
15. **薬学生の方にお尋ねします。** (他学部の方は16にお進みください。)
あなたは将来、薬剤師として、禁煙指導をしたいと思いますか?
a. そう思う b. ややそう思う c. あまりそう思わない d. そう思わない
16. 現在、本学では、指定された場所以外は全面禁煙となっていますが、喫煙場所がなくなり敷地内全面禁煙になるとしたら賛成ですか?
a. 賛成 b. やや賛成 c. やや反対 d. 反対

17. それはなぜですか?

裏面にもお答えください

IV 喫煙者の方のみお答え下さい。

1. あなたは、朝目覚めてから何分ぐらいで最初のたばこを吸いますか?
a. 5分以内 b. 6~30分 c. 31~60分 d. 60分以後
2. あなたは、喫煙が禁じられている場所、例えば図書館、映画館などでたばこを吸うのを我慢することが難しいと感じますか?
a. はい b. いいえ
3. あなたは、1日の中でどの時間帯のたばこをやめるのに最も未練が残りますか?
a. 朝起きた時の目覚めの1本 b. それ以外
4. あなたは、1日何本吸いますか?
a. 10本以下 b. 11~20本 c. 21~30本 d. 31本以上
5. あなたは、目覚めてから2~3時間以内の方がその後の時間帯より頻繁にたばこを吸いますか?
a. はい b. いいえ
6. あなたは、病気でほとんど1日中寝ている時でも、たばこを吸いますか?
a. はい b. いいえ
7. あなたが喫煙を始めたきっかけや動機は何ですか?
a. かつこいいと思った b. 友人・知人に勧められて
c. 何となく d. その他 ()
8. 禁煙した経験はありますか?
a. ある () 回 b. ない

問8で「ある」と答えた方にお尋ねします。 (「ない」と答えた方は11にお進みください。)

9. その時どのような症状・状態が現れましたか? (複数可)
a. イライラ、集中しにくいなど b. 眠気、気分が沈むなど
c. 食欲増進、体重増加など d. その他の身体症状 ()
10. 再喫煙に至った原因は何ですか?
a. 上記の症状が我慢できなかった b. 周囲の喫煙者につられて
c. 喫煙できる環境が近くにあった d. なんとなく e. その他 ()
11. 自分はタバコに依存していると感じることがありますか?
a. そう思う b. ややそう思う c. あまりそう思わない d. そう思わない
12. あなたは禁煙することに関心がありますか?
a. 関心がある b. やや関心がある c. あまり関心がない d. 関心がない

質問はここまでです。ご協力ありがとうございました。

図1A 「喫煙に対する意識調査」アンケート用紙(3年次以上)上:表,下:裏

1, 2 年次生用

喫煙に対する意識調査

ご協力をお願いします。

薬学部 衛生化学研究室 佐藤実佳 中村真之 杉村政宏
(調査責任者 山口孝子)

・衛生化学研究室では、これまで、喫煙が生体に及ぼす影響についての研究に取り組んできました。
・このアンケート調査によって、皆様の喫煙に対する意識及び本学における喫煙状況を把握し、さらには喫煙による健康被害の予防、禁煙を目指す学生の支援に貢献できるようになりたいと考えています。
・アンケートに回答いただくことにより、この調査に同意をいただいたこととなります。個人を特定し得る情報の公開は一切ありません。なお、アンケート結果は学会や学術誌へ公表されることをご了承ください。

あてはまる選択肢に○をつけるか、() 内に票数・割合を記入してください。

I

1. 学部 : a. 法学部 b. 経済学部 c. 経営学部 d. 人文学部 e. 栄養学 f. 総合リハビリテーション学部
g. 薬学部 h. 現代社会学部

2. 学年 : a. 新 1 年 b. 新 2 年

3. 性別 : a. 男 b. 女

4. 年齢 : () 歳

II

1. 周りでタバコを吸っている人はいますか? いる場合、それは誰ですか? (複数可)
a. 家族 b. 友人 c. 先生 d. 恋人 e. その他 () f. 吸う人はおはい

2. 喫煙防止教育を受けたことがありますか? ある場合、それはいつ頃ですか? (複数可)
a. 小学校 b. 中学校 c. 高校 d. 大学 e. その他 ()
f. 受けたことがない (円と答えた方は、5にお進みください)

3. これまでに何回くらい喫煙防止教育を受けましたか?
a. 1 回 b. 2~4 回 c. 5~8 回 d. 9 回以上

4. どのような喫煙防止教育を受けましたか? (複数可)
a. 講演会 b. 家庭内 c. 授業 d. その他 ()

5. 喫煙は身体に様々な影響を与えています。喫煙によりリスクが高まることが報告されている疾患等には、次のどれが該当すると思いますか? (複数可)
a. 肺がん b. 気管支がん c. 喉頭がん d. 食道がん e. 胃がん f. 肝がん g. 脾がん h. 大腸がん
i. 胃潰瘍 j. 潰瘍性大腸炎 k. うつ病 l. 高血圧 m. 動脈硬化 n. 心筋梗塞 o. 骨粗鬆症
p. 気管支喘息 q. COPD (慢性閉塞性肺疾患) r. 白内障 s. 歯周病 t. 流産

6. 「受動喫煙」という言葉を知っていますか?
a. 意味も含めて知っている b. 言葉は知っているが、意味はよくわからない c. 今回の調査で初めて知った

7. 「受動喫煙」とは、他人のタバコの煙を吸われることをいいます。
あなたは「受動喫煙」にあったことがありますか? a. あり b. ない

円と答えた方は、5にお進みください。

8. あ、あなたは、これまで受動喫煙にあったとき、不快感を感じたか?
a. 不快感を感じた b. どちらかといえば不快感を感じた
c. どちらかといえば不快感を感じなかった d. 不快感を感じなかった

9. あなたは、そのときどのような行動をとりましたか? (複数可)
a. 喫煙者に喫煙を控えるよう求めた b. 自分が喫煙場所を移動した
c. 自分が我慢した d. 何にも行動しなかった

10. 受動喫煙は身体に悪影響をもたらしていると思いますか?
a. そう思う b. ややそう思う c. あまりそう思わない d. そう思わない

11. 受動喫煙によりリスクが高まることが報告されている疾患等には、次のどれが該当すると思いますか? (複数可)
a. 肺がん b. 胃がん c. 肝がん d. 副鼻腔がん e. 喉頭がん f. 小児がん g. 乳がん
h. 気管支喘息 i. 中耳炎 j. 潰瘍性大腸炎 k. 虚血性心疾患 l. 低体重出生児 m. 乳幼児突然死症候群

12. 禁煙支援活動に関心がありますか?
a. 関心がある b. やや関心がある c. あまり関心がない d. 関心がない

13. 禁煙指導は薬剤師の仕事であると思いますか?
a. そう思う b. ややそう思う c. あまりそう思わない d. そう思わない

14. **薬学生の方にお進みします。** (他学部の方は15にお進みください)
あなたは将来、薬剤師として、禁煙指導をしたいと思いますか?
a. そう思う b. ややそう思う c. あまりそう思わない d. そう思わない

15. 現在、本学では、指定された場所以外は全面禁煙となっていますが、喫煙場所がなくなり**敷地内全面禁煙**になるとしたら賛成ですか?
a. 賛成 b. やや賛成 c. やや反対 d. 反対

16. それはなぜですか?
[]

17. もし学内で、禁煙・喫煙防止に関する講習会・イベント等があれば、参加しますか?
a. 参加する b. 参加しない c. わからない

III

タバコに対する意識をお聞かせください。 あなたの気持ちに一番近いものを a~d の中から選んで下さい。

1. タバコを吸うこと自体が病気になる。 a. そう思う b. ややそう思う c. あまりそう思わない d. そう思わない

2. 喫煙には文化がある。 a. そう思う b. ややそう思う c. あまりそう思わない d. そう思わない

3. タバコは嗜好品 (趣味や娯楽を楽しむ品) である。 a. そう思う b. ややそう思う c. あまりそう思わない d. そう思わない

4. 喫煙する生活様式も尊重されてよい。 a. そう思う b. ややそう思う c. あまりそう思わない d. そう思わない

5. 喫煙によって人生が豊かになる人もいます。 a. そう思う b. ややそう思う c. あまりそう思わない d. そう思わない

6. タバコには効用 (からだや精神に良い作用) がある。 a. そう思う b. ややそう思う c. あまりそう思わない d. そう思わない

7. タバコにはストレスを解消する作用がある。 a. そう思う b. ややそう思う c. あまりそう思わない d. そう思わない

8. タバコは喫煙者の病気の働きを高める。 a. そう思う b. ややそう思う c. あまりそう思わない d. そう思わない

9. 医者はタバコの害を騒がさない。 a. そう思う b. ややそう思う c. あまりそう思わない d. そう思わない

10. 灰皿が置かれている場所は、喫煙できる場所である。 a. そう思う b. ややそう思う c. あまりそう思わない d. そう思わない

質問にもお答えください

質問はここまでです。ご協力ありがとうございました。

図 1 B 「喫煙に対する意識調査」アンケート用紙 (1, 2 年次) 左 : 表, 右 : 裏

結果

アンケート用紙は 3 年次以上の学生に対して 3900 枚配布され、3660 枚回収され (回収率 93.8%)、1, 2 年次生に対して 4316 枚配布され、4203 枚回収された (回収率 97.3%)。そのうち、記載に不備があったものを除いた有効枚数は 3 年次生以上 2385 枚 (有効回答率 61.2%)、1, 2 年次 2946 枚 (有効回答率 68.3%) で、合わせて 5331 枚 (有効回答率 64.9%) で

表 1 回答者の学部内訳

	3 年次以上				1, 2 年次			
	男性		女性		男性		女性	
	回答数 (人)	対在籍数 (%)	回答数 (人)	対在籍数 (%)	回答数 (人)	対在籍数 (%)	回答数 (人)	対在籍数 (%)
1. 薬学部	170	45.1	335	59.9	164	62.6	250	73.5
2. 栄養学部	18	58.1	93	54.7	19	63.3	116	63.4
3. 総合リハビリテーション学部	88	39.5	95	55.2	147	61.0	112	70.4
4. 法学部	276	33.5	113	56.5	381	40.6	130	66.7
5. 経営学部	138	29.2	139	62.6	225	47.3	159	75.4
6. 経済学部	249	38.2	75	57.3	371	56.3	92	70.2
7. 人文学部	246	43.0	317	65.0	346	54.7	295	60.8
8. 現代社会学部					92	62.2	47	82.5
大学院	10	20.4	23	51.1				

- 21 -

あった。不備として除外した中には、喫煙あるいは受動喫煙によってリスクが高くなる疾患（3年次以上用アンケートⅡ－6，Ⅱ－12，1，2年次用アンケートⅡ－5，Ⅱ－11）として潰瘍性大腸炎（誤りの選択肢）を選択していた回答者が含まれる（405枚）。リスクが高くなるとして選択した疾患の数は、誤りを選択しなかった者では、喫煙 4.6 ± 3.4 ，受動喫煙 2.3 ± 1.7 であったのに対し、誤りを選択した者では、喫煙 16.1 ± 5.0 ，受動喫煙 9.7 ± 4.0 であり、著しい差がみられた。この結果から、誤りを選択した回答者を除外することは、疾患認知度を計る上で妥当と判断された。

表1に回答者の内訳を示す。アンケート用紙の配布時に学部を把握することは困難であったため、表1には在籍者数に対する割合を記す。全在籍者数は10334名で、これに対する有効回答の割合は51.6%であった。

1. 各学部における喫煙状況

各学部における喫煙状況（3年次以上用アンケートⅡ－2）は表2に示すとおりであった。毎日喫煙する者（以下、喫煙者）の割合（以下、喫煙率）は、男女とも薬学部において低かった。全体としては、男性の喫煙率が14.2%，女性が2.5%であった。「ときどき吸う」と回答した者（以下、間欠喫煙者）は、男性3.5%，女性1.1%であり、「吸っていたがやめた」と回答した者（以下、元喫煙者）は、男性5.3%，女性2.4%であった。

表2 各学部における3年次以上学生の喫煙状況

		喫煙者		間欠喫煙者		元喫煙者		非喫煙者	
		(人)	(%)	(人)	(%)	(人)	(%)	(人)	(%)
男性	1. 薬学部	14	8.2	6	3.5	9	5.3	141	82.9
	2. 栄養学部	2	11.1	2	11.1	0	0.0	14	77.8
	3. 総合リハビリテーション学部	13	14.8	4	4.5	1	1.1	70	79.5
	4. 法学部	47	17.0	9	3.3	22	8.0	198	71.7
	5. 経営学部	24	17.4	6	4.3	10	7.2	98	71.0
	6. 経済学部	31	12.4	9	3.6	9	3.6	200	80.3
	7. 人文学部	37	15.0	5	2.0	12	4.9	192	78.0
女性	1. 薬学部	1	0.3	0	0.0	3	0.9	331	98.8
	2. 栄養学部	2	2.2	1	1.1	3	3.2	87	93.5
	3. 総合リハビリテーション学部	2	2.1	2	2.1	4	4.2	87	91.6
	4. 法学部	5	4.4	3	2.7	7	6.2	98	86.7
	5. 経営学部	2	1.4	0	0.0	3	2.2	134	96.4
	6. 経済学部	2	2.7	1	1.3	1	1.3	71	94.7
	7. 人文学部	15	4.7	6	1.9	7	2.2	289	91.2

2. 喫煙によりリスクが高くなる疾患の認知度

喫煙によりリスクが高くなる疾患（3年次以上用アンケートⅡ－6，1，2年次用アンケートⅡ－5）として提示したaからtのうち，j．潰瘍性大腸炎を除く19疾患の学部ご

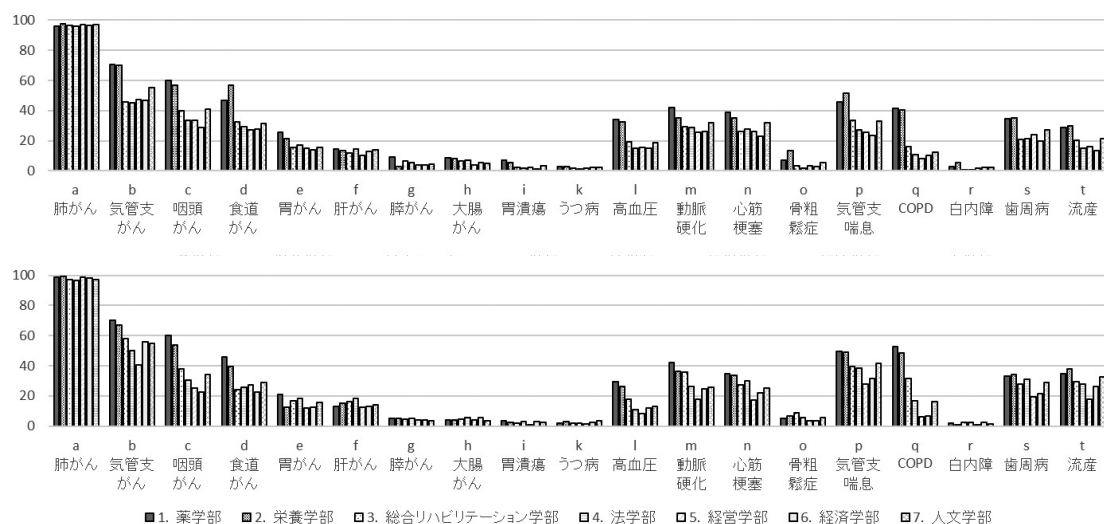


図2 喫煙によりリスクが高くなる疾患についての各学部における回答率 上：男性，下：女性

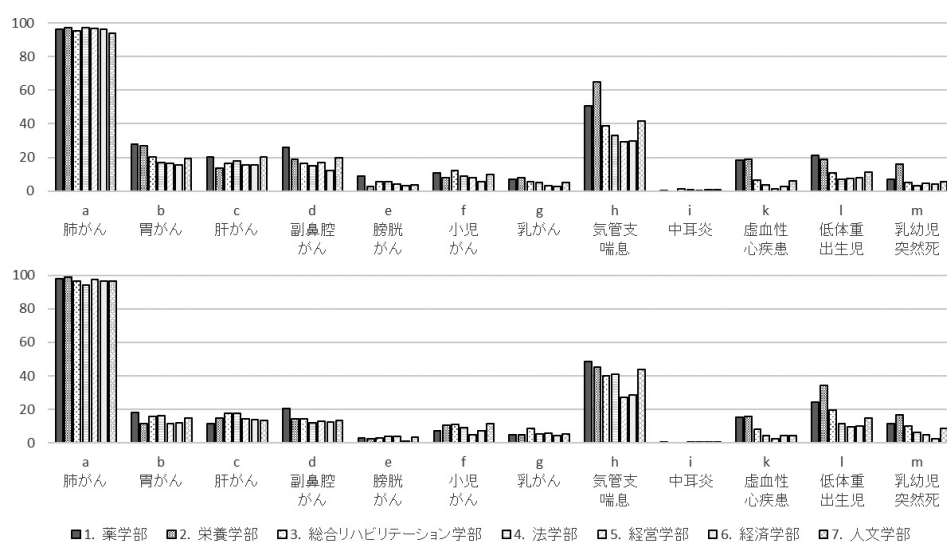


図3 受動喫煙によりリスクが高くなる疾患についての各学部における回答率 上：男性，下：女性

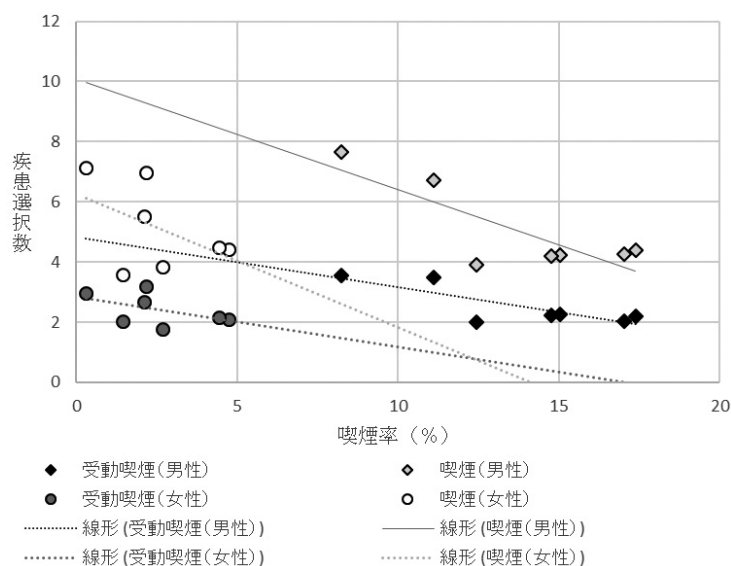


表3 喫煙によりリスクが高くなる疾患の選択数を学部・喫煙状況別に比較した結果

	①喫煙者		②間欠喫煙者		③元喫煙者		④非喫煙者		⑤1, 2年次生		H検定・多重比較
	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差	
男性											
1. 薬学部	8.5	4.3	8.8	3.3	7.7	4.2	7.5	4.0	4.6	3.7	①と⑤ $p<0.01$ ④と⑤ $p<0.001$
2. 栄養学部	7.0	—	10.5	—	—	—	6.2	4.9	5.5	3.1	
3. 総合リハビリ テーション学部	5.7	3.1	4.0	3.0	1.0	—	4.0	3.5	4.3	3.3	
4. 法学部	3.9	2.8	2.8	3.0	5.0	4.3	4.3	3.1	3.8	3.0	
5. 経営学部	4.5	3.0	3.3	1.7	2.8	2.3	4.6	3.3	3.6	2.9	
6. 経済学部	2.9	2.2	4.2	3.6	6.6	3.2	4.0	3.0	3.6	2.9	①と③ $p<0.05$
7. 人文学部	3.8	2.4	7.6	2.7	5.1	2.8	4.2	2.8	4.7	3.5	
8. 現代社会学部	—	—	—	—	—	—	—	—	4.2	3.5	
大学院	6.3	1.2	6.0	—	7.0	—	10.4	4.1	—	—	
女性											
1. 薬学部	10.0	—	—	—	4.7	2.9	7.2	3.6	4.6	3.1	④と⑤ $p<0.001$
2. 栄養学部	9.0	—	4.0	—	8.3	1.7	6.9	3.6	4.7	2.8	④と⑤ $p<0.05$
3. 総合リハビリ テーション学部	1.0	—	5.0	—	8.0	2.1	5.5	3.2	4.2	3.2	④と⑤ $p<0.05$
4. 法学部	3.4	3.4	2.7	1.2	7.0	3.8	4.4	2.9	4.4	3.4	
5. 経営学部	5.0	—	—	—	2.0	0.0	3.6	2.6	3.3	2.6	
6. 経済学部	4.0	—	4.0	—	9.0	—	3.8	2.5	4.0	3.0	
7. 人文学部	5.7	3.7	3.7	1.1	2.6	2.3	4.5	2.9	4.5	3.2	①と③ $p<0.05$
8. 現代社会学部	—	—	—	—	—	—	—	—	10.5	4.8	
大学院	—	—	—	—	2.5	—	6.4	3.2	—	—	

との回答率を男女別に図2に示す。

学部間での多重比較の結果、薬学部では、多くの疾患について他学部よりも回答率が高かった。膀胱がん、大腸がん、胃潰瘍、うつ病、骨粗鬆症および白内障の回答率はきわめて低かった。

受動喫煙によりリスクが高くなる疾患（3年次以上用アンケートⅡ-12、1、2年次用アンケートⅡ-11）についての回答結果を同様に図3に示す。薬学部と栄養学部において、気管支喘息、虚血性心疾患の回答率が他学部に比べて高かった。栄養学部女性では、低体重出生児の回答率が高かった。

各学部の喫煙率と、選択した疾患数の平均値の関係を図4に示す。男性では、喫煙あるいは受動喫煙がリスクとなる疾患の選択数と喫煙率には負の相関関係が認められた（相関係数-0.82, -0.81）。一方、女性では緩やかな相関がみられたものの、有意ではなかった。

次に、各学部の喫煙状況ごとに、喫煙、受動喫煙によりリスクが高くなる疾患の選択数を表3と表4に示す。

医療系学部では1、2年次生と、3年次以上の非喫煙者の間で、疾患の認知度に有意な

表4 受動喫煙によりリスクが高くなる疾患の選択数を学部・喫煙状況別に比較した結果

	①喫煙者		②間欠喫煙者		③元喫煙者		④非喫煙者		⑤1, 2年次生		H検定・多重比較
	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差	
男性											
1. 薬学部	3.6	2.8	4.2	2.3	4.0	3.0	3.5	2.5	2.3	1.7	④と⑤ $p<0.001$
2. 栄養学部	3.5	—	5.0	—	—	—	3.3	2.8	2.4	1.5	
3. 総合リハビリテーション学部	2.6	2.1	1.0	0.0	1.0	—	2.3	1.6	2.4	1.8	
4. 法学部	1.8	1.3	1.1	0.3	2.5	2.7	2.1	1.5	2.2	1.8	
5. 経営学部	2.1	1.3	1.3	0.7	1.6	1.3	2.3	1.7	2.0	1.4	
6. 経済学部	1.5	1.3	1.8	1.9	2.9	1.8	2.0	1.5	1.9	1.4	①と③ $p<0.05$
7. 人文学部	1.9	1.3	3.2	1.9	2.9	1.7	2.3	1.5	2.5	1.7	
8. 現代社会学部	—	—	—	—	—	—	—	—	2.3	2.0	
大学院	3.0	0.8	2.0	—	5.0	—	3.8	2.0	—	—	
女性											
1. 薬学部	1.0	—	—	—	2.3	1.2	3.0	2.0	2.2	1.5	④と⑤ $p<0.001$
2. 栄養学部	5.5	—	1.0	—	3.7	0.5	3.1	2.2	2.3	1.7	④と⑤ $p<0.05$
3. 総合リハビリテーション学部	1.0	—	2.5	—	4.5	2.6	2.6	1.8	2.3	1.7	④と⑤ $p<0.05$
4. 法学部	1.8	1.6	1.0	0.0	4.0	2.7	2.1	1.5	2.3	1.6	
5. 経営学部	1.0	—	—	—	1.3	0.5	2.1	1.5	1.9	1.4	
6. 経済学部	2.5	—	1.0	—	3.0	—	1.7	1.2	2.1	1.6	
7. 人文学部	3.3	2.4	1.8	1.1	1.1	0.3	2.1	1.4	2.5	1.8	①と③ $p<0.05$
8. 現代社会学部	—	—	—	—	—	—	—	—	2.1	1.7	
大学院	—	—	—	—	1.0	—	3.1	2.0	—	—	

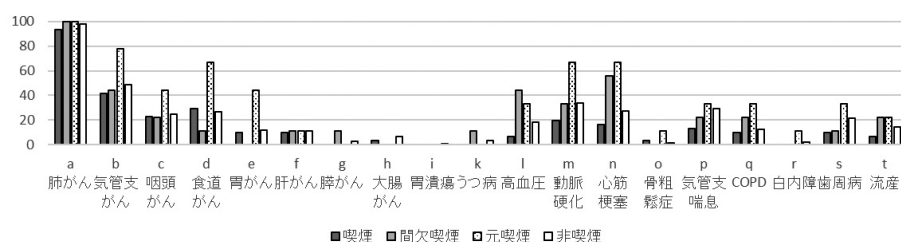


図5 喫煙によりリスクが高くなる疾患の回答率（経済学部男性、喫煙状況ごと）

差が認められた。非医療系学部の中で、喫煙率の低かった経済学部男性において、元喫煙者が喫煙者よりも多くの疾患について、喫煙、受動喫煙がリスクとなることを認識していた。経済学部男性の各疾患に関する回答率を比較すると、元喫煙者は、心筋梗塞について喫煙者よりもリスクとして認識している率が高かった（図5）。

次に、喫煙者の中で禁煙を試みたことがあると回答した人と、ないと回答した人との間で、喫煙、受動喫煙のリスクについての回答率を比較した（図6）。男性の喫煙者では、禁煙をしたことがある人の方がCOPDの回答率が高かった。女性では、禁煙の有無による

大学生の意識調査

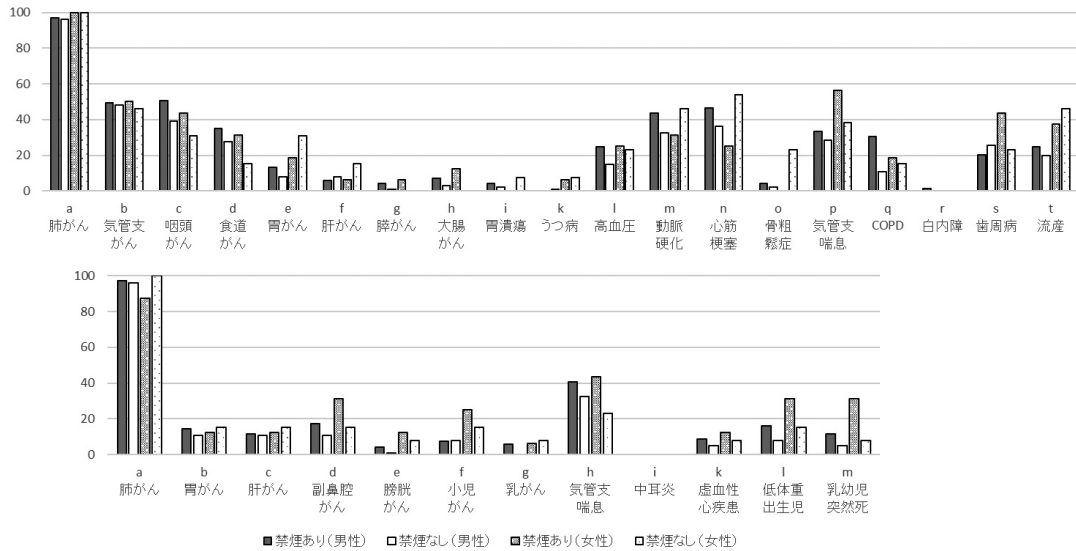


図6 喫煙，受動喫煙によりリスクが高くなる疾患についての回答率と禁煙経験の関係
上：喫煙，下：受動喫煙

有意差は認められなかったが，男性とは別の傾向がみられ，喫煙のリスクとして歯周病，受動喫煙のリスクとして乳幼児突然死を選択する率が高い傾向がみられた。

考察

本学における学生の喫煙状況と喫煙に関する意識を調査した結果，喫煙や受動喫煙がリスクとなる疾患をより多く認識している学部において，喫煙率が低くなっていることが示された（図4）。喫煙率の低かった栄養学部，薬学部においては，1，2年次生に比較して，3年生以上の非喫煙者で，より多くの疾患について，喫煙，受動喫煙がリスクとなることを認識していた（表3，表4）。これは専門教育の効果が反映されたものと考えられる。これら2つの学部では，喫煙によりリスクが高くなる疾患として，肺癌以外のがん，COPD，高血圧，動脈硬化などを選択する率が高く，受動喫煙によりリスクが高くなる疾患として気管支喘息，虚血性心疾患などを選択する率が高かった（図2，図3）。したがって，健康被害を幅広く認識させることが喫煙防止に有効と考えられる。喫煙者よりも元喫煙者において，心筋梗塞を喫煙の害と認識している人が多かったこと（図5）からも，健康被害の正しい認識が喫煙防止に結びつくことが期待される。

禁煙を経験した人では，COPDを喫煙の害として認識している人が多かった（図6）。がんは目に見えないまま，ゆっくりと進行するが，呼吸機能の低下は若年の喫煙者でも感じやすく，肺年齢を計測することにより可視化することもできる。そのため，COPDを喫煙の害と認識することは，喫煙に至ってしまった者を禁煙に向かわせるのに有効だったのではないと思われる。また，女性では，歯周病，乳幼児突然死などを喫煙や受動喫煙の害として認識している人が男性よりも多く，美容や母性などに関連した事柄に着目していることがうかがえた。

受動喫煙を含めた喫煙は，生活習慣病の最大の危険因子とされている（Ikeda 2012）。政府は，健康増進法（平成14年法律第103号）の規定に基づき，「21世紀における国民健康づ

くり運動（健康日本21）」の方針の下、受動喫煙防止、禁煙支援、禁煙教育などに取り組んでおり、目標の一つとして、未成年者の喫煙をなくすことを掲げ、特に教育の場は対策の徹底が必要としている（財団法人厚生労働統計協会 2012）。学校教育においては、小学校「体育」および中学校の「保健体育」で、喫煙が健康を損なう原因となることを指導するように、また高等学校「保健体育」では、喫煙が生活習慣病の要因となることを指導するように求められている（学習指導要領 http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/cs/1320004.htm（小学校）、http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/cs/1320079.htm（中学校）、http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/_icsFiles/afieldfile/2011/03/30/1304427_002.pdf（高等学校））。今回、調査対象となった学生の多くは、過去に2～4回の喫煙防止教育を受けたと回答しており（3年次以上用アンケートⅡ－4，1，2年次用アンケートⅡ－3，結果示さず）、肺がんについては9割以上が認識していたが、その他の疾患を認知しているものは少なく、気管支がんさえも認知度は5割に満たなかった。また、受動喫煙による中耳炎の悪化に関しては、ほとんど知られていなかった。一方、上述のように、喫煙率の低かった2学部（理・工）の学生は、喫煙・受動喫煙によりリスクが高くなる疾患として、より多くの疾患を認識しており、禁煙を経験した学生は、肺がん以外にCOPDや心筋梗塞のリスクを認識していたことから、喫煙による健康被害を幅広く認識させることが喫煙防止教育にとって重要と考えられた。タールで真っ黒になった肺の映像は印象に残りやすく、喫煙や受動喫煙の健康被害として、肺がんが注目されがちであるが、喫煙の影響はそれだけではない。ニコチンの血管収縮作用、一酸化炭素による酸素欠乏が及ぼす健康への影響も非常に重大である。生活の質を著しく悪化させるCOPDや動脈硬化が喫煙と密接に関係している生活習慣病であるという認識を高めることが喫煙防止につながると考えられる。また、受動喫煙による健康被害についての教育にも力を注ぐべきである。児童・生徒にとっては、受動喫煙の方が、自分に関係した内容として捉えやすいと考えられ、受動喫煙による呼吸器の変化の画像や、煙の拡散する様子の動画などで可視化することにより、受動喫煙による被害についての理解が得やすく、喫煙防止教育に有効と考えられる。例えば、日本循環器学会が制作したビジュアル教材「今から始める喫煙防止教育」のように、肺以外への影響や受動喫煙による被害にも注目した教材を用いた教育がのぞまれる。さらに、喫煙防止教育の前後において喫煙による健康被害についての認識を問い、理解度を確認して次のプログラムに活かすことが必要と考えられる。

今回の調査結果から、喫煙や受動喫煙による健康への有害な影響が多岐にわたる事実を、正しく理解することが喫煙防止教育に有効と考えられた。今後、肺がんだけでなく呼吸機能の低下を可視化する工夫や、呼吸器系以外の健康被害についてのわかりやすい解説を取り入れた、喫煙防止に効果的な独自の教材・教育プログラム作成を目指し、取り組んでいきたい。

参考文献

- 1] 喫煙と健康問題に関する検討会, (2002), 『新版 喫煙と健康』, 東京, 保健同人社, 79-155.
- 2] 喫煙と健康問題に関する検討会, (2002), 『新版 喫煙と健康』, 東京, 保健同人社, 200-251.
- 3] Ikeda, Nayu. Inoue, Manami. Iso, Hiroyasu. Ikeda, Shunya. Satoh, Toshihiko. Noda, Mitsuhiko. Mizoue, Tetsuya. Imano, Hironori. Saito, Eiko. Katanoda, Kota. Sobue, Tomotaka. Tsugane, Shichiro. Naghavi, Mohsen. Ezzati, Majid. Shibuya, Kenji. (2012). “Adult Mortality Attributable to Preventable Risk Factors for Non-Communicable Diseases and Injuries in Japan: A Comparative Risk Assessment”. Pros Medicine. 9. E1001160.
- 4] 森本泰子, 山口孝子, 宮川明宏, 井上和紀, 山崎裕康 (2015), 「大学生への意識調査を通じた喫煙防止教育のあり方に関する一考察」, 『教育開発センタージャーナル』, 6, 37-50.
- 5] Yoshii, Chiharu. Kano, Masato. Isomura, Takeshi. Kunitomo, Fumio. Aizawa, Masaaki. Harada, Hisashi. Harada, Shohei. Kawanami, Yukiko. Kido, Masamitsu. (2006). “An Innovative Questionnaire Examining Psychological Nicotine Dependence, “The Kano Test for Social Nicotine Dependence (KTSND)””. Journal of UOEH. 28. 45-55.
- 6] 財団法人厚生労働統計協会, (2012) 『国民衛生の動向2012/2013』, 97-99.

2016年度 中国語スピーチコンテストの参加報告

岩田 弥生

グローバル・コミュニケーション学部（以降G C学部）中国語コース1年生、2年生、及び英語コース2年生のスピーチコンテスト（＊）への参加状況をご報告します。

なお、入賞した学生の記事を、大学・G C学部各々のホームページ及びG C学部のフェイスブックに掲載しています。

（＊）開催年月：2016年9月－12月

開催場所：関西地区（〇〇大学・××大学・・・）

コンテスト内容：中国語朗読・暗誦大会、スピーチコンテスト、歌唱コンクール

1. コンテストへの参加希望調査

2016年5月、学生が校外のスピーチコンテストに対してどれくらい関心を持っているかを調べる為、1、2年生向に対し中国語スピーチコンテストの参加に対する希望調査を行いました。

1年生に対しては、出場に興味を持っているかどうかについての調査を、2年生に対しては具体的なコンテストの名前を提示し、参加の希望を調査しました。調査結果を以下に記します。

参加希望調査（1年生）

調査内容：

スピーチコンテストのアンケート：①～③の中、当てはまるものを選んで下さい。

- ①参加してみたい。
- ②興味はあるけれど、迷っている。
- ③参加したくない。

表1：アンケート結果

質問項目	人 数	比 率
①参加してみたい。	12	41%
②興味を持っているけれど、迷っている。	11	38%
③参加したくない。	6	21%
合計	29 (全員回答)	100%

表1 から80%近い学生が、参加に対し興味を持っていることが分かります。

参加希望調査（2年生）

調査内容：

2年生に対しては、多くの学生に参加してもらうことを目的とし、具体的なコンテスト名を提示した上での調査としました。

表2：アンケート結果

質問項目	人 数	比 率
中国通	1	7 %
全日本学生中国語弁論大会（大阪府大会）	1	7 %
J A L 中国語スピーチコンテスト	8	53%
全日本中国語スピーチ大会大阪府大会	2	13%
どれでもいい	3	20%
合計	15 (全員回答)	100%

表2から、2年生の80%が具体的に出場したいコンテストがあることがわかります。

2. コンテストの出場状況

出場したコンテストの内容及び結果を表3にまとめました。

表3

コンテスト	応募締切	大会日時	内 容	出場者	結 果
中国通	9月9日	10月8日	スピーチ、クイズ、パフォーマンス	3名 中国語1年1名 中国語2年1名 英語 2年1名	2等賞 中国語1年
全日本中国語スピーチコンテスト 大阪府大会	10月15日	10月22日	朗読、暗誦、スピーチ	5名 中国語1年4名 中国語2年1名	3等賞 中国語1年
立命館孔子学院 中国語スピーチコンテスト	10月14日	11月20日	スピーチ	1名 中国語1年1名 中国語2年1名	入賞 中国語1年
J A L 中国語スピーチコンテスト	11月4日	11月26日	スピーチ	3名 中国語1年4名 中国語2年1名	無し
全日本学生中国語弁論大会	10月29日	11月26日	スピーチ	2名 中国語2年2名	無し
西日本地区 中国語歌唱コンクール	11月18日	12月17日	歌唱	1名 中国語2年1名	3等賞 中国語2年

表3のように6つの大会に合計15名の学生（英語コースの学生1名を含む）が出場しました。

これは中国語コースの約30%の学生が出場したことになります。

ここから本学の学生が中国語学習、特にスピーチコンテスト等の参加に対して高い意欲を持っていることが分かります。

3. コンテスト出場後のアンケート

2017年1月、コンテストに出場した学生に対してアンケートを実施しました。

アンケート内容：

スピーチコンテストに参加した感想

1. 応募する前にこのようなコンテストがあることを知っていましたか？
・はい ・いいえ
2. このようなコンテストに興味を持っていましたか？
・はい ・いいえ
3. 参加することによってご自身の中国語レベルが上がったと思いますか？
・はい ・いいえ
4. これからも参加したいと思いますか？
・はい ・いいえ
5. 後輩に参加するように勧めますか？
・はい ・いいえ
6. 出場するまでにどのように練習すればよいと思いますか？
例えば：授業中、放課後、指導者と一対一、留学生と練習するなど。
7. 朗読大会・スピーチコンテストに対して何か思ったことがあれば、書いて下さい。
なんでも結構です。

アンケートの結果を表4にまとめました。

表4

アンケート項目	はい	いいえ
1 番	15名	0 名
2 番	14名	1 名
3 番	15名	0 名
4 番	15名	0 名
5 番	15名	0 名

アンケート 6 番及び7 番の回答の一部を以下に列挙します。

- 6 番
- ・少し時間を設けてもらって、クラスメートの前でスピーチしてみる。
 - ・文は覚える。人前に慣れる。
 - ・お風呂で暗記する。
 - ・放課後、先生と練習すること。
 - ・朝、授業が始まる前に、指導者の前で練習する。
 - ・電車の中で口だけ動かして声は出さずに練習する。帰宅したら、声に出す。
 - ・放課後、先生に指導して頂く。

- ・授業中などに人前でやって慣れておくことが必要だと思います。あとはとにかく暗記しておくことが大事なので、言い方の練習と更にきちんと覚えているかどうかの確認も必要だと思います。

- 7 番
- ・実際前に出るとすごく緊張して頭が真っ白になったりしたけど、人前に出て発表することやスピーチコンテストに向けて練習すると同時に新しい言葉を必然と覚えることができたので、いい経験だった。
 - ・歌唱コンクールは勝ち負け関係なく人の温かさを感じました。
 - ・いろいろな人から良い影響を受けることができる。
 - ・練習過程が大事だと思います。本番はおまけ。
 - ・本当に前に立つと人がいて緊張はするが、出ることで自信がつく。
 - ・大会に出る人は発音がきれいな人たちばかりなので、そこで競うことは基本として、スピーチの内容を深めたり、使う単語を難しいものにするという作文を作る練習を日頃からすべきだと思いました。

4. これまでの反省及び今後の方針

上記からわかる様に、G C 学部の学生は、中国語の学習意欲があり、かつ練習の機会を欲しています。

この観点から見ると、コンテストの参加自体は中国語の学習意欲を高める効果があるものの、今年度は、スピーチの原稿を仕上げてからコンテスト本番までの間は 指導者との 1 対 1 での練習が主体であり、授業等を通じて「人前で発表する練習が不足」していたことが反省としてあげられます。

次年度以降は、学生に対し、より積極的にコンテストへの参加を促し、参加予定者が「原稿の準備」「授業にて発表練習をする機会を得ること」「授業での発表練習時に学生が相互に評価をすること」により、参加者の大会での結果が向上するだけでなく、学生全員の「語学力の進歩」が期待できます。

加えて、この「準備」「授業での発表」「相互評価」のプロセスは教職課程とも通じるものが多く、教職を希望する学生の意識向上につながるものと考えます。

「教職教育センタージャーナル」投稿規程

2014年10月16日制定

1. (目的)

神戸学院大学教職教育センターは、教職教育に関する研究成果や実践報告を収集・蓄積・発信することにより、組織的な教員養成に寄与することを目的として「教職教育センタージャーナル」(以下、本ジャーナルという)を発行する。

2. (受領原稿)

本ジャーナルが受領する原稿の種類は以下のとおりとし、(3)を除き他のメディアに未発表または現在投稿されていないものに限る。なお、投稿者は下記のどの区分での掲載を希望するかを、投稿申請時に明記すること。

- (1) 論文：教職教育に関する研究論文で、著者自身によるオリジナルな研究成果をまとめたもの
- (2) 実践研究：授業実践、教材・教具の開発等、教職教育に関する実践をまとめたもの
- (3) その他：教職教育センター・各学部等の活動報告、教職教育に関わる研究会・研修会・講演会などの参加報告、資料紹介、書評、学生の活動記録等

3. (刊行頻度)

本ジャーナルは、原則として年1回刊行する。

4. (ホームページでの公開)

本ジャーナルに掲載する論文等は、原則として教職教育センターのホームページ上で公開する。

5. (編集委員会及び編集委員長)

本ジャーナルの編集委員会は、教職教育センター委員会がこれを担当し、編集委員長は教職教育センター所長がこれを兼務する。

6. (編集委員会の権限)

編集委員会は、受領原稿を審査の上、ジャーナル掲載の採否を決定する。ただし、受領原稿(1)(2)の掲載に関する採否については、原則として2名以上の査読者による査読を経て、最終的に編集委員会の審査により決定する。なお、査読者については、編集委員長の判断に基づいて学内外の研究者に依頼し、その氏名の公表は行わないものとする。

7. (事務局)

本ジャーナルの編集委員会事務局を教務センター教務事務グループに置く。

8. (投稿資格)

本ジャーナルに投稿が認められる者は、原則として本学の教職員または学生とする。ただし、編集委員会が認めた場合はこの限りではない。

9. (掲載の順序)

論文の掲載の順序は、原則として原稿の種類ごとに受理の順とする。

10. (校正)

著者は原稿と照合して校正を行う。その際、原稿の書き換えは行わないものとする。

11. (執筆要領)

執筆要領は別に定める。

12. (著作権)

掲載された論文等の内容についての責任は著者が負うものとする。また、その著作権は著者に属し、編集出版権は神戸学院大学教職教育センターに属する。

13. (その他)

その他必要な事項は、編集委員会で定める。

14. (要項の取扱い)

本要項の取扱いは、教職教育センター委員会が行う。

「教職教育センタージャーナル」執筆要領

2014年10月16日制定

1. 原稿の種類

- (1) 論文：教職教育に関する研究論文で、著者自身によるオリジナルな研究成果をまとめたもの
- (2) 実践研究：授業実践、教材・教具の開発等、教職教育に関する実践をまとめたもの
- (3) その他：教職教育センター・各学部等の活動報告、教職教育に関わる研究会・研修会・講演会などの参加報告、資料紹介、書評、学生の活動記録等

2. 原稿の分量

掲載原稿1篇の分量は、本文・注・引用文献・参考文献・図表およびその簡単な見出しを含み、原則として以下を目安とする。ただし、編集委員会が認める場合はこの限りではない。

- (1) 論文：14ページ以内
- (2) 実践研究：14ページ以内
- (3) その他：5ページ以内

3. 投稿の手続き

次の3点を投稿期限までに、神戸学院大学教務センター教務事務グループ宛に提出する。

- (1) 投稿申請書（神戸学院大学教職教育センターウェブサイトから入手）
- (2) 原稿電子媒体
- (3) プリントアウトした原稿（2部）

4. 校正等

初校校正のみ投稿者が行い、以後は誤植等に関し編集委員会が行う。

5. 原稿作成上の留意点

(1) 原稿の書き方

- ①原稿は、本文、図、表、要旨、キーワードからなるものとする。また、可能な限り英文要旨と英文キーワードを含むものとする。
- ②本文は、原則として Microsoft Word で読み取り可能な文書ファイルとし、A4版縦位置、1段組みで作成する。
- ③体裁は、上下に20mmと左右に30mmの余白、1行44文字、1ページ42行とし、書体は、和文を『MS明朝』、英文を『Times New Roman』とする。また、文字サイズは表題を『18pt』、それ以外を『10.5pt』もしくは『11pt』とする。
- ④原稿は、日本語表題・英文表題、日本語著者名・英著者名、日本語要旨、英文要旨、日本語キーワード、英文キーワード、本文、引用・参考文献の順で記載する。また、第1ページにおいて、最下行に線を引き脚注を挿入する等して、著者の所属と役職を記載する。

(2) 図・表について

- ①図・表は、原稿中の該当する箇所に挿入し、図表の番号およびキャプションを付記する。この場合、上下を本文から切り離して1行ずつあけるものとする。
- ②図・表は鮮明に描き、そのまま製版できるものを提出する。
- ③製版に際して縮小しても差し支えないよう、線や字の大きさ等全体の体裁を考えて作製する。
- ④図の大きさや地図の縮尺を示すときはスケールを図中に示す。
- ⑤写真は鮮明なものをを用いる。

(3) 引用・参考文献について

- ①本文中の文献の引用方法は、各学問分野の慣例に従うものとし、共通の規則は定めない。
- ②引用・参考文献は本文末に一括し、アルファベット順または50音順（同じ著者の場合は年代順）、あるいは引用順に記載する。

(4) 要旨・英文要旨・英文キーワードについて

- ①論文の内容を具体的に表す400字程度の要旨と、論文検索用キーワード（6語以内）を、それぞれ日本語で記載する。
- ②簡潔な英文要旨と英文キーワードを可能な限り付記する。